人物みのかも ⑥

岐阜県考古・民俗学研究の草分け

林 魁一

岐阜県の考古学・民俗学の草分けともいうべき林魁一は、明治八年十二月七日、林小一郎の長男として太田村に誕生した。現在の重要文化財・旧太田脇本陣林家住宅においてである。父・小一郎は県はもとより衆議院議員として中央政界でも活躍した大政治家である。

明治二十八年、岐阜中学を卒業した彼は、その夏、眼を病んだ弟につき添って上京した。弟が東京帝大病院に入院している間、つれづれを紛らすため、病室のすぐ窓下にある東京帝大人類学教室を訪れた。そこには、日本考古学の先駆者である坪井正五郎がおり、鳥居龍蔵ら若い考古学者も研究室に出入りしていた。魁一は、東京滞在の約一ヶ月間、毎日のように研究室に通って坪井・鳥居両氏らの指導を受け、また近郊の遺跡発掘にも参加した。

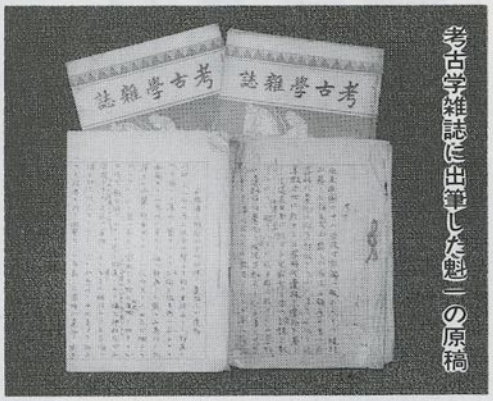
秋を迎え、帰郷の途につく彼に坪井は原稿用紙百枚に打製石斧と縄文土器片を添えて渡し、美濃の遺跡や出土品を調査して報告するよう依頼した。魁一の美濃における調査活動はこのとき始まったのである。

彼は、岐阜から太田へ向かう人力車の上からも鋭い注意を怠らなかった。そして、酒倉村芦渡（現・坂祝町）において打製石器を発見した。これが調査の第一歩で、以後、次々と、太田・古井を中心とした加茂地方での調査研究をつづけ、明治三十一年、彼は坪井正五郎の主宰する東京人類学雑誌に「美濃国加茂郡石器時代遺跡」を発表、つづいて「美濃加茂郡古井大字川合字塚原ノ古墳」「鷹之巣ノ古墳」を矢つぎばやに発表した。一方彼は、民俗学にも興味を持ち、明治三十五年、東京人類学雑誌の論文募集に応じて「美濃国太田地方オハグロ習俗」を発表、これが縁となって数年後、柳田国男と相知るようになる。

略歴➡明治８年(1875)太田村に林小一郎の長男として生まれる。明治28年、上京後、東大人類学教室・坪井正五郎らの指導を受けたのをきっかけに考古学研究にとりくむ。民俗学も含めて多数の論文を発表して県内の文化向上に寄与すると同時に後進の指導にも力を注ぐ。昭和36年没、享年86歳。

彼の研究活動の最も油ののりきった時期は明治三十年代後半から昭和初期にかけての約三十年間で、この間、毎年数回にわたって「東京人類学雑誌」（後「人類学雑誌」と改題）などに研究論文や調査報告を発表した。彼の生涯を通じ、学術雑誌に発表された考古学論文は一五〇を越え、民俗学関係のものも約五〇編に及んでいる。

このようにして美濃・飛騨地方における考古学者・民俗学者としての林魁一の名は、全国的に知られるようになった。彼のもとには、考古・民俗学の学者をはじめ、これらの学を志す多くの学生たちが出土品の見学を兼ねて指導を受けに来訪したが、嫌な顔ひとつせず親切に応対した。たとえ相手が紅顔の中学生であっても、この態度は変わらなかった。林家を訪れた学生で、後に大成した人も少なくない。国学院大学名誉教授・樋口清之もその一人である。



考古学雑誌に出筆した魁一の原稿

彼のコレクションは、戦後、名古屋の蓬左文庫や南山大学に寄贈され、後進の貴重な資料となっている。晩年になって身体の自由を欠くようになっても、夫人にささえられながら、各地の学会や発表会に出席し、研究に対する情熱は衰えなかった。

彼はまた、昭和初期に太田町長を一期、岐阜県議を一期つとめたが、いずれも推されて断り切れず引き受けたものである。しかし政治家・林魁一は似つかわしくない。やはり学問の人であった。

昭和三十二年、岐阜日日文化賞を受けたが、昭和三十六年十二月二十四日、眠るがごとく八十六歳の生涯を終えた。